

小学校児童のジェンダーに関する意識と実態

○余語宗紀* 諏訪きぬ** (*鳥取大学大学院 **鳥取大学)

<目的> 本研究は、ジェンダーイデオロギイの意識を育てるための教育の内容を、より小学生児童の実態に即して検討するために、児童の持つジェンダーに関する意識と実態を明らかにすることを目的としている。

<方法> 1996年10月、鳥取市内の公立小学校2校の全学年各1クラス児童とその親、計386組を対象に質問紙法により調査を行った。

<結果> ①将来結婚したときの自分と相手の家事と労働への関わり方に対する考え方では、3年生以上で同じ様な一定の傾向が見られた。男子児童が女性に家事中心でと考える傾向にあるのに比べ、女子児童は将来仕事をすることに積極的な児童が多く見られた。②3年生以上の児童の考える自分の将来の役割分担像と、その親が児童の将来に望む役割分担像は、似たような傾向を示していた。しかし、親子で必ずしも一致するという傾向にある訳ではなかった。③現在、実際にお手伝いとして家事を行うことで、将来家事分担をすることに積極的になるというわけではないようだが、手伝いたいと思っている児童は将来行うことにも積極的な傾向が見られた。④男らしさ・女らしさに対する考え方は、1年生からすでに持っていると考えられた。①の結果と合わせて考えると、「らしさ」と「性別役割」が結びついていくのが3、4年生の時期なのではないかと考えられ、この時期の教育が特に重要だと思われる。今後この点について検討を重ねていきたい。